千葉・長須賀条里制遺跡

1　所在地　千葉県館山市下真倉字舞台
2　調査期間　一九九三年（平5）一一月～一九九八年八月
3　発掘機関　㈶千葉県文化財センター
4　調査担当者　高梨俊夫ほか
5　遺跡の種類　旧河道・水田跡・集落跡
6　遺跡の年代　弥生時代～中世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

長須賀条里制遺跡は館山平野の南部に位置し、南北を汐入川と境川、東西を丘陵と砂丘列に取り囲まれた、標高約九mの後背湿地上に所在する。遺跡周辺には条里型の水田区画が広範囲に存在しており、宅地化の影響を受けているものの現在でも基本的な地割は残存している。

今回の調査は国道建設に伴うもので、弥生時代・古墳時代の旧河道や水田、古代以降の条里型水田、中世の掘立柱建物などの遺構が検出された。特に古墳時代後期の旧河道には、扉材を再利用した木樋が設けられており注目される。なお、検出された条里型水田は、表層条里と方向を同じくするものであるが、共伴する遺物が少なく開田時期を決定するには至っていない。

（館　山）

古代以降の遺物としては、土師器・須恵器・青磁・中世陶器・銭貨などがあげられるが、耕作によって著しく磨耗・細片化しているものが目立つ。

木簡は調査区南端のAB区2層（暗灰褐色粘質土）から出土した。2層は近世以降の水田耕作土と考えられるが、明確な水田遺構は検出されず、出土遺物についても時期幅が大きい。このため木簡の年代は決定しがたい。なお、調査報告書では中世前後の所産と推定している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「六日山□〔荻カ〕」　(101)×29×6　019

板目材で上端の一部と下端を欠失している。上端には刃物による切断痕が認められる。調査地点の東側上流部に現在も「山荻」の地名が残っており、当該地との関連が注目される。

9　関係文献

㈶千葉県文化財センター『館山市長須賀条里制遺跡・北条条里制遺跡』（二〇〇四年）

（大谷弘幸〈千葉県立中央博物館〉）

『平城宮発掘調査報告XVI―兵部省地区の調査』

（奈良文化財研究所学報第七〇冊）の刊行

平城宮の八省クラスの官衙の全貌を初めて明らかにした発掘調査報告書が刊行された。遺構・遺物・文献史料の総合的な検討によって、奈良時代後半、東区朝堂院南辺の朝集殿院と壬生門の間には、東に式部省、西に兵部省が東西対象に配されていたことが明らかになっており、本書はそのうちの兵部省を対象とするものである。八棟の瓦葺き礎石建物からなり、南に開いたコの字型の空間を構成するきわめて格式の高い空間を構成する一方、建築様式には明確な序列が設けられていた。

省内の遺構からの木簡の出土はないが、西側を南に流れる中央区と東区の間の基幹排水路SD三七一五からは、これまでに一五九一点の木簡が出土しており、本書ではその概括的な考察を試みている。また、平城宮内の平面構造についての総括的な再検討を行ない、新しい平城宮像を提示している。

市販は左記の通り。

奈良文化財研究所編『平城宮兵部省跡』A4判　本文編三〇四頁、図版編二九二頁、吉川弘文館発売　一三三一〇〇円（税込み）